

令和元年6月13日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04095

研究課題名(和文) 貧困低所得の世代的再生産についての基礎的研究

研究課題名(英文) Primary studies of intergenerational reproduction of poverty and low income

研究代表者

稲葉 昭英 (Inaba, Akihide)

慶應義塾大学・文学部(三田)・教授

研究者番号：30213119

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：大規模な公共利用データを用いて貧困低所得層の世代的再生産に関する計量分析を行った。その結果、ひとり親世帯の子(中学3年生)の教育アスピレーション(進学期待)が低く、成績が悪く、勉強時間が少ない傾向がみられた。とくにこの傾向は父子世帯の子に大きかった。多変量解析の結果、母子世帯の子に見られる差異は所得の低さからほぼ説明されえたのに対して、父子世帯の子に見られる差異は所得からは説明されえなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回の分析結果からは、母子世帯については所得保障を充実させることで子どもの勉強面での格差を縮小しうるといえるが、この効果は父子世帯には期待できないということになる。父子世帯にみられる格差が生じる過程は十分に理解できていないが、親子関係の希薄さが原因だとすると政策的に介入することは難しい。父子関係を代替・補完できるような関係を作ることが望まれる。

研究成果の概要(英文)：In order to clarify mechanisms of intergenerational reproduction of poverty and low income, we analyzed data set of "Survey of parent-child daily opinion and attitude" by Japanese Cabinet Office and "National Family Research of Japan" by Japan Society of Family Sociology quantitatively. From the analysis of "Survey of parent-child daily opinion and attitude", we found children of single parent family (all of them are 3rd grade of junior high school) had low educational aspiration, low educational achievement and didn't have enough time to study. This tendency was evident for children of single father household. Multivariate analysis showed that disadvantage among children of single mother household was explained by their low income, but those of single father household was not explained by income. Parent-child relationship of shingle father household showed generally weak and was suggested that children are left to do as they like.

研究分野：社会学

キーワード：貧困 家族 ひとり親 世代的再生産 母子世帯 父子世帯 格差 計量分析

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

2000 年前後から子どもの貧困および貧困の世代間連鎖の問題が社会的に関心を呼ぶところとなった。本研究の問題意識もその関心と共通している。子どもの貧困が成人期にどのような影響を及ぼすのか、いかなる政策的な対応が必要なのかはとくに 2010 年以降、多くの研究者が競って成果を発表する領域となった。本研究はそうした中で、行われたものである。

### 2. 研究の目的

定位家族での経験、とくに貧困やひとり親などの経験がその後の人生に及ぼす影響を大規模社会調査データを用いて計量的に明らかにする。また、そうした事象が発生するメカニズムを検証するとともに、あらたなメカニズムを探索的に検討する。

### 3. 研究の方法

内閣府「親と子の生活意識に関する調査」(2011 年)、日本家族社会学会による全国家族調査(NFRJ98、NFRJ03、NFRJ08)を用いて家族構造と子どもの成績、教育アスピレーション、達成学歴などとの関連を検討する。また、仮説探索のために質的な研究もとりにいる。

### 4. 研究成果

定位家族の貧困はパネルデータでない限り測定が難しく、この代理指標が「父不在」「母不在」などの家族構造である。内閣府「親と子の生活意識に関する調査」を分析した結果、母子世帯・父子世帯の子と二人親世帯の子どもとの間には顕著に成績や教育アスピレーション(希望学歴)に差がみられた。とくに父子世帯の子は母子世帯の子以上に顕著に低い数値を示した。成績や教育アスピレーションは学歴と連動し、学歴は所得と連動するため、以上の変数の関連は貧困の世代間連鎖の存在を意味している。

このうち、母子世帯と二人親世帯の差異は世帯の所得を媒介としたもので、所得の低さが子どもに見られる成績や勉強時間、教育アスピレーションの差異を作り出していた。このことは、母子世帯における教育格差の解消には所得保障を中心とした対応が有効であることを示している。一方、父子世帯の子は母子世帯以上に成績や勉強時間、教育アスピレーションなどの点で差異がみられ、またこれらの差異は所得によって説明されるものではなかった。

母子世帯の子に見られる教育格差は所得の低さから生じていることが明らかになったが、逆に言えば所得が低いにも関わらず社会保障制度が機能していないことが問題を生み出している側面がある。研究協力者の吉武理大は、相対的貧困状態にあるにもかかわらず生活保護制度を利用しない母子世帯が多くみられることに着目し、生活保護の利用を規定する要因を同データで検証した。この結果、自立志向が強いほど、正規職にあるほど、高学歴であるほど相対的貧困状態にあるにもかかわらず、制度の利用が抑止されることが明らかになった。自立を求める社会的な圧力が、貧困であるにも関わらず制度を利用することへの嫌悪感を当事者の内面に生み、この結果として貧困状態が改善されないという過程が明らかにされた。

また、吉武は東大社研のパネルデータを用いて親の離婚を経験している者自身が成人後に離婚を経験しやすいことを分析的に明らかにし、そのメカニズムとして早婚の存在を指摘している。10 代の離婚率の高さはよく知られているが、親の離婚経験者が 10 代で結婚し、離婚することで母子世帯が再生産される過程が示された。

こうした中で、あらためて注目されるようになったのがひとり親世帯で多いケア労働従事者としての子どもの問題である。こうした子どもたちを呼ぶ呼称としてヤングケアラーという概念が近年使われているが、ヤングケアラーは要介護者の存在を前提にしているところがあり、われわれの問題関心とはやや異なる部分がある。研究協力者の大橋恭子はこれらの点について理論的に検討した報告を行っている。

ひとり親世帯では子どもが家庭内のケア労働にすすんで参加し、結果的に学習時間やサークル活動への参加機会が制約されることが理論上予想された。研究協力者の小正貴大は、これらの点を探索的に明らかにするために、ひとり親世帯が多い離島の過疎集落においてフィールドワークを実施した。集落では強い紐帯によって人々が結びつき、そのことがさまざまな生活上の問題の発生を予防していた。この点からすると、定位家族の問題が子どものライフコースに与える影響はコミュニティの社会関係資本のあり方、およびそうしたコミュニティに包摂される程度に大きく影響を受けることが仮説として導かれた。

また、研究協力者の大久保心は、貧困低所得の世代的再生産は子どもの時間的な社会化の問題ではないか、という問題意識のもと、所得階層別に子どもの時間意識(時間を守る、計画を立てるなどの意識)の内面化度を分析した。予想とは逆に、学校教育にとって子どもたちの時間意識は標準化されていた。貧困の世代的再生産を抑止するメカニズムとして、学校教育の効果が改めて示されたといえる。

研究協力者の夏天は、中国の大規模データ(CFPS2000)を用いて子どもの教育アスピレーションと親のかかわりについて、二人親世帯と留守児童世帯(二人親のいずれか/双方が都市部などに仕事上の理由で滞り、不在である世帯)の比較を行った。この結果、男子においてのみ両親不在世帯と子どもの教育アスピレーションの負の関連が示された。両親の不在が子どもの行動への統制を緩やかなものにした結果だと考えられ、いわゆるペアレンティング仮説を支持するものであるが、この結果は男子のみに示され、夏はこれを女子は社会規範を内面化して

おり、親の不在による子どもの行動面の変化が生じないためではないか、と推測している。留守児童世帯はひとり親世帯と異なり、必ずしも貧困低所得ではないが、日本のひとり親世帯出身者の進学率などは女子に低いことが明らかにされており、対照的な結果であることに注目すべきだろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

吉武理大、2019「離婚の世代間連鎖とそのメカニズム 格差の再生産の視点から」、『社会学評論』、276 (印刷中)。(査読あり)

吉武理大、2019「貧困母子世帯における生活保護の受給の規定要因 なぜ貧困なのに生活保護を受給しないのか」、『福祉社会学研究』、福祉社会学会 16: 157-178 頁。(査読あり)

稲葉昭英、2018「全国家族調査(NFRJ)のこれまでとこれから」、『家族社会学研究』30(2):247-249。(査読なし)

稲葉昭英、2017「家族の変化と家族問題の新たな動向」、『都市社会研究』9:1-14。(査読あり)

大久保心、2017「就学前教育で生じるタイムマネジメントの分析視点」、『時間学研究』8: 1-17。(査読あり)

〔学会発表〕(計 6 件)

稲葉昭英、「変わる家族/変わらない家族」第 91 回日本社会学会大会シンポジウム、甲南大学、2018 年 9 月、

吉武理大、「貧困母子世帯における生活保護制度の利用と問題」、福祉社会学会第 16 回大会、中京大学、2018 年 6 月、

大橋恭子、「ヤングケアラー概念の再構成」福祉社会学会第 16 回大会、中京大学、2018 年 6 月

大久保心、「中高生の時間規律・時間管理が成績と進学期待に与える影響」、第 10 回日本時間学会大会、2018 年 6 月、

大久保心、「就学前教育における子どもの時間的社会化」、第 69 回日本教育社会学会大会、一橋大学、2017 年 10 月

吉武理大、「親の離婚と子どもの家族形成 親の離婚経験者の結婚と離婚に着目して」、日本社会学会第 90 回大会、東京大学、2017 年 9 月

〔図書〕(計 1 件)

稲葉昭英、2017「家族研究と二次分析」藤崎宏子・池岡嘉孝編『現代日本の家族社会学を問う』ミネルヴァ書房、173-190 頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：吉武 理大

ローマ字氏名：(YOSHITAKE, Rio)

研究協力者氏名：大久保 心

ローマ字氏名：(OHKUBO, Shin)

研究協力者氏名：吉田 俊文

ローマ字氏名：(YOSHIDA, Toshifumi)

研究協力者氏名：大橋 恭子

ローマ字氏名：(OHHASHI, Kyoko)

研究協力者氏名：夏 天

ローマ字氏名：(Xia, Tian)

研究協力者氏名：小正 貴大

ローマ字氏名：(KOMASA, Takahiro)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。